

学部・研究科 Faculty/School	学科・コース Course
国際協力研究科	国際協力政策専攻

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt;  
 (4) ジェンダーに敏感な災害対策はどのようなものだと思いますか

このレポートでは、はじめに全体を通して見たことや感じたこと考えたことについて、次にジェンダーに敏感な災害対策について、最後にこのプログラムを通して成長できた点についてまとめます。

はじめに、全体的に学んだことや考えたこととして、大きく”地域 “に着目して述べたいと思います。今回のサマープログラムでのフィールドトリップなどを通して、必要とされる防災対策としては BPBD をはじめとする各地域でのコミュニティの防災体制の強化に重点をおいていることがわかりました。カマダン地区での tsunami marine hazard、避難訓練での映像を見せて頂きました。カマダン地区での地域全体を巻き込んだ避難訓練やカマダン地区の地域の人々が災害時の警鐘として使用している伝統楽器を見せて頂いたことから地域コミュニティレベルでの災害に対する意識を高めることにまた、マラピ火山から避難された方々の村を訪問した際に感じたこととしては、村ごとでの避難や姉妹村 (sister village) や姉妹学校 (sister school) などが設けられており、コミュニティを重視した避難対応であることから、改めて村ごとのコミュニティの強さを感じました。地域コミュニティでできる防災が実践されていることから、日本においても取り組める防災対策になり得るだろうと考えました。これに関連することとして、インドネシアの防災対策における問題点として、地域市民に対する被災することについての調査で 48 パーセントが伝統的な宿命だと考えていることから、防災対策に対する意識が挙げられると考えました。また、インドネシアにおける問題点として挙げられていたこととしては、他に地方自治体の災害マネジメント能力、避難対策と現実とのギャップなどがありました。問題点や今行われている防災対策においても、“地域” というワードが非常に重要であると感じました。

次に、災害時における人道支援とリスクマネジメントについてのレクチャーの中で、リスクマネジメントの中で、リーダーシップが行政においても、地域レベルにおいても重要であるとされていました。災害時におけるリーダーシップにおいてジェンダーと一貫した問題があると考えました。また印象深かった点としては、災害はリスクマネジメントが十分ないしは適切でないことが要因であるとされていました。その例として、リスクというものは、hazard(障害),exposure (身を危険にさらすこと) ,vulnerability(脆弱性) によって構築されており、その例えとしてリスクを「怪我をする」、hazard を階段やデザイン性における障害、exposure を靴のデザインに置き換えたものが挙げられていました。この例えで、災害リスクマネジメントのイメージがより湧きやすくなりました。

Shelter Mountain Area では、実際に被災した人々への聞き取り調査を行って、当時の状況やシェルターでの生活、どのような経緯で来られたのかについてインタビューさせて頂きました。インタビューさせて頂いた女性が、マラピ火山の噴火によって住んでいた土地からの移住、3 年に及ぶシェルターでの生活、経済的に余裕のある生活ではないという状況下にあるという話を受けました。その中で、「経済状況は気にしていない、生きることができているということに感謝している」とが非常に印象深かったです。また、シェルターでの生活で最も困難だったことについて質問させて頂きましたが、共同生活ということで様々な性格の人がいる中でシェルター内の人間関係の構築に関する問題が最も困難だったこととして挙げられていました。加えて、今回の地域コミュニティでのインタビューを通して、自らの修士論文研究でのインタビュー調査で活かせる経験ができたと感じています。インタビュー調査を実行する際に、どのように地域の人々とコミュニケーションをとるのか、相手を尊重した質問ができているか、必要な情報を引き出せているかなどを実際に今後直結して活かせる経験になりました。

次に、ジェンダーに敏感な災害対策について考えた点として、実際にインドネシアでの災害対策などを学び、

フィールドトリップなどで対策、救助に関する組織を訪問しましたが、災害支援、災害救助を行うアクター側に女性が少ないという印象を受けました。災害救助チームに女性がいるのかという質問した時に、女性が災害救助チームの業務に携わることは困難であるという返答を受けました。その理由としては、業務時間が24時間体制であることから、女性が家を空けることが難しく、業務に参加することが困難であるということだとお聞きしました。このことから、やはり根本にあるジェンダーのよって職業へのアクセスが制限されていることや“被害者としての女性”の脆弱性だけでなく、防災対策のプロセスの中でも“アクターとしての女性の脆弱性”が存在していることがわかりました。社会の根本にあるジェンダーギャップというものに対する問題意識を社会全体で持たなければならないと感じました。また、災害時におけるジェンダーの脆弱性についてのレクチャーで触れられていた避難所での生活で男性のリーダーが設けられることが多いことも日本における災害時のジェンダーに関する問題の一つとして挙げられます。避難所やシェルターでのリーダーに関しての問題では、女性のリーダーシップに関する啓発を災害時だけでなく、社会全体として取り組まなければならないと考えました。これらのことから根本的に社会的、文化的にジェンダーへの意識を高めなければならないと感じました。

最後に、このプログラムで最も成長できた点としては、レクチャーやフィールドトリップを通して学んだことや感じたことを、いかに自分の研究分野に活かすことができるか、関連付けられるかということを考えて取り組んだ点です。柔軟に吸収しよう意識して取り組むようになったことは、今後の研究では勿論ですが、社会の中でも生かされる力をみにつけることができたと思います。